

ットワークが八方に育つ。その「無政府主義」的なまでの「雑草性」（吉田優貴）は、若き日の竹村が携わった『職場の歴史』や「木曜会記録」（宮本又郎）にも横溢し、人民でも大衆でもないmultitudeの生き様（水嶋一憲）の、いまや貴重な歴史史料として賦活する。さらに「民主主義科学者協会」や「地団研」の実相（金子務）、『歴史評論』編集をめぐる確執。それは「マルクス主義唯物史観」が「歴史家の阿片」（長田俊樹）であったことをも浮き彫りにする。「隠微な口伝」に留まらぬ、学術史の暗部に迫る真摯な同時代証言としても「あじわい深い」（井上章一）。

サルデーニャでグラムシの故郷を思い、瀬戸内は因島で遙か諫早の天草四郎を想う竹村。「霸道」的主流迎合を峻拒するその自在で洒脱な「王道」精神（関智英）に、あえて「海賊」の称号を授けたい。秩序の矛盾に風穴を開け（多田伊織）、女性の声や聾啞者の身体に同調しつつ、史料の山と格闘する姿勢（田坂和美）。職工の潰れた爪と手の皺に階級意識の発芽をみる洞察（『職場の歴史』あとがき）。そこに、交錯する既成秩序の空白地帯を狙い撃ちする竹村流「海賊史観」の見識がある。「海賊」こそは、産軍複合体制の表裏を往還する「二重存在」doppelgängerの謂だったのだから。

※『竹村民郎著作集』全5巻、『竹村民郎著作集完結記念論文集』三元社編集部編、2015年。

対王政転覆と裏腹だった。権力篡奪と革命への危機感を背景として、関東大震災直後、内務官憲により「朝鮮人騒擾」謀議が工作された。従来白眼視されてきた植民地官僚の生態解剖なくして、虐殺の実態は立体視できない（松田利彦）。「不逞鮮人」や満蒙の「馬賊」といった「陸の海賊」を捏造・演出することで、いかに民衆を団体なる虚偽意識へと誘導するか。そこに、グラムシを横目にして竹村が長年提唱してきた「天皇制サンディカリズム」解明の鍵もある（影浦順子、林淳）。主体なき「戦争マシーン」には、「陽明学」の思想と、安岡正篤なる実態不明の「黒幕」も「トリモチ」よろしく附着する（鈴木貞美・大谷敏夫・斎藤成也・伊東貴之）。

「在野精神」（伊藤晃・林正子）と中央権力との関係は、竹村の学究としての生涯の経糸をなす。漱石晩年の「遊民」（小松史生子）意識の帰趨を活写した『大正文化』（1980）はそれ自体、講座派マルクス主義主流史観から見れば「正体不明の雑音」にして「危険なスキャンダル」（小島亮）だった。浅草の遊興や田端文士村の生態に肉薄する一方（荒井良雄、近藤富枝）、ハウードの田園都市の日本版を阪神間マダニズムに見いだし（前川洋一郎、高木博志）、宝塚歌劇を熱愛する竹村（細川周平）。その「生活へのまなざし」（原宏一）は、教条的マルクス主義者の視野狭窄とは無縁の「遊び」（瀧井一博）に溢れている。「遊び」marginからは、緯糸としての裏ネ

## 連 載 162 制度の綻び目・通説の自墮落を 追撃する『海賊史観』

竹村民郎著作集完結記念論文集刊行によせて

国  
際  
日  
本  
文  
化  
研  
究  
セ  
ン  
タ  
ー  
研  
究  
員  
・  
綜  
合  
研  
究  
大  
学  
院  
大  
学  
教  
授  
稲  
賀  
繁  
美

『大正文化』『廃娼運動』などの著作で知られる経済史家、社会史家、竹村民郎氏の著作集全5巻が昨年完結した。それを受けて『竹村民郎著作集完結記念論集』が刊行された。大正時代といっても、もはや体験者は稀であり、若い世代には実感も湧くまい。竹村には『独占と兵器生産』（1970・勁草書房）がある。日露戦争後、第一次世界大戦を経験する世界の帝国主義体制は、産軍複合体の確立と軌を一にしている。日本の大陸進出・植民地経営も、「資本の自己増殖」が自己目的化するこの世界システムのメカニズム（磯前順一）への、極東からの遅延した参入として理解される。竹村はいち早く遼東半島先端の港湾都市、満洲への入り口たる新興都市・大連（稲賀繁美）における廃娼運動に着目した（西原和海、藤永壯）。実際そこには、帝国日本の社会問題が、租借地ならではの密度で集約されていた。

社会秩序の裏側に隠され、理不尽な不利益を被った民に寄り添う姿勢は、初期の竹村から一貫している。それを広義の「海賊」という範疇で捉えたい。欧州大戦特需で躍進した造船業のみならず、半島や大陸の経営もまた、海洋帝国・日本の実態と表裏をなす（玉木俊明）。欧米列強に伍す地位向上とは、非白人国家の躍進と言うに留まらない。外では「国際協調」に割り込む「海賊」性が「黄禍」呼ばわりを招く。内でも労働争議の頻発が「労働者」という階級意識の覚醒を誘う。第一次世界大戦終結はドイツやロシアでの絶